

噛み付く様にキスをする。否、様に、ではなく、本当に唇に噛み付いた。ガリ、という音と唇の皮が破れた感触が歯から伝わり血の味が僅かに触れた舌先に広がる。しかしそれを味わう暇も無く、後頭部に走った痛みはロンクーは顔を歪めた。

「痛えぞドヘタクソ。誰がキスして良いつつた」

ぶちぶちと髪が抜ける音がする程に後頭部を掴まれ、顔を離される。睨んだ相手はこの上無く不機嫌そうな顔をして、唇に滲んだ血を親指で拭いた。

「……お前の許可を待てばいつまで経っても出来ないだろう」

仕返しとばかりに両手で相手の赤茶色の頭を掴み、再度顔を近づけると、舌打ちした音の一拍後にゴツ、と鈍い音が響いて一瞬目の前が真っ白になった。頭突きされたらしい。

「調子のんな。お前にキスされても嬉しくも何ともねえ」

「……だからするのだと言ったら？」

「どうされてえんだよ」

「……」

嫌がらせでキスをする趣味はロンクーには無いが、すればこの男は嫌がるし不快そうな顔をする。それが憎たらくして、またやってしまう。悪循環だと分かっていたが、止める気にはなれなかった。何を言っても馬鹿にされてしまうだろうから暗に嫌がらせだと言えば、相手も暗に「否、はつきりと目で」「ぶつ殺す」と言っていた。

「キスもセックスも素人のお前が、俺満足させられると思って

んのかあ？」

「……元はお前が俺を襲っただろう？」

「けっ、相手探すが面倒だっただけだつっの」

独特の間延びした喋りで忌々しげに言い放つた男は、確かに以前水浴びをする為に野営を離れたロンクーを捕まえ、そして行為に及んだ。しかし男が挿入した訳ではない。ロンクーに跨り、自分で腰を振ったのだ。激しい戦闘の後は疲労も大きい、気が昂り過ぎて治まらない時がある。それは男性戦士の方が顕著に現れ、酒や女で鎮める事もあれば自分で処理する事もある。ロンクーはたまたまこの男が自分で処理していた所を通り掛かつて、相手をさせられたという訳だ。

「お前の方が挿れる側に見える癖にな」

「だーれが野郎相手に突っ込みてえもんかよ。それとも何だ、お前突っ込まれる方が良いつてのかあ？」

「いや……、ごめん被る」

頭突きされた箇所がまだ痛みを残していて、本当にこの男は石頭だなどロンクーは顔を曇める。癪だったので男の首元に何の前触れも無く噛み付くと痛えだろとまた頭を叩かれたが、構わず思い切り歯を立てると再度皮膚が破れる音がした。

「痛えつっつてんだろー！」

「ぐっ……」

噛まれたまま無理に引き離そうとすれば肉を食い千切られる可能性があるからか、男はロンクーの腹を膝で蹴った。ただ、

そこまで強い力で蹴られた訳ではなかったので嘔吐するまでに  
は至らない。流石に自分の肩に吐かれるのは嫌だったのだろう。

「……痛く、したんだから、当たり前だろう」

「へっ、フェリアの剣士様はそういうプレイがお好みか。女共  
に聞かれたらさぞかし嘆かれるこつたろうよ」

「……女に興味は無い」

息も切れ切れにロンクーが言った言葉は、以前の彼ならば言  
わなかった様なものだっただろう。それに対して男は鼻で笑っ  
て彼を馬鹿にしたのだが、ロンクーは矢張りさらりと本音を言  
い、それに対して男は露骨に嫌そうな顔をする。ロンクーはこ  
の表情がそれなりに気に入っていた。自分にしか見せない顔だ  
からだ。

「そう仕向けたのはお前だろう、グレゴ」

「知るかあ、んな事。あん時お前がたまたま通り掛かっただ  
け……っ」

鼻で笑う様に言われた言葉を遮る様に男の——グレゴの股  
間を掴むと彼は腰を一瞬だけ引いたが、それ以上は引かなかっ  
た。逃げられてしまわない様に、否、嫌そうな顔をしている割  
には逃げる気配は見受けられなかったけれども、力を籠めて肩  
を掴んで睨めば見下した様な視線が貫く。経験が無いと知って  
いただろうに初めてを奪った彼が余りにも憎らしい事を言うも  
のだから、ロンクーは乱暴にグレゴのズボンの中に手を突っ込  
み、直に握った。大抵の男ならいきなり掴まれば痛みを感じ

るものだと思うのだが、グレゴは今までそういう抱かれ方をさ  
れてきているのか多少乱暴に扱われる方が好きな様だった。丁  
寧に愛撫しようにもさせて貰える事は滅多にない上、しても結  
局ドヘタクソと罵られるけれども。

「これが一番黙らせるにや、手っ取り早いとか思ってたやがる、  
だろ？ 単純な奴だな」

「……硬くしておいて良く言っ」

「ああ？ 人の事言えんのかこの早漏」

「く……っ！」

手に握ったペニスの先端を指の腹で擦れば、硬く隆起してい  
くのが分かる。ペニスを愛撫するしか悪態を封じる術を知らな  
いと言われたので手の中のもの硬さを抑えようと、突然膝で  
股間を痛いくらいに刺激されて滑稽な程ロンクーの体が跳ねた。  
外部からの刺激に慣れていない事を十二分に知っているグレゴ  
はロンクーのその反応にやっとなら笑ったが、その表情はやはり  
馬鹿にした様な顔だとロンクーは思う。…実際馬鹿にされてい  
るのがだ。

「硬くしてんのはどっちだ、まだ触ってもねえ癖におっ勃てや  
がって。俺のケツにぶち込みたくて堪らねえってかあ？」

「……まあな」

「……はっ、良い具合に性格捻くれやがって。女の前じゃ、あ  
ーんなもじもじする癖によお」

グレゴの悪態は挑発だ。乗ればまた馬鹿にしなから嘲笑して

くる。世の中の酸いも甘いも味わい、汚い部分を散々見てきた男にしてみれば、ロンクーなど無知な若造に見えてしまうだろう。実際そうであるのでぐうの音も出ない。

男を受け入れる事に慣れていくらしいグレゴがどういう過去を持っているのか、ロンクーには分からない。聞いても「お前には関係ねえだろ」と蹴されてしまうからだ。ただ、彼は傭兵であるし文字通り体を売っている訳なので、雇い主から行為を要求された事もあるのだろう。ロンクーはそれが気に食わない。

「誰のせいだと思ってる」

「さーて、ねえ」

「……本当に憎たらしい、な、お前は……」

相変わらず膝で刺激されている股間がかなりの熱を帯びていて、いい加減下帯を解いてしまいたい。だがグレゴはにやにやと笑って快感と痛みが混ざる程度の力を籠めた膝を擦り付けるだけで、それ以上のロンクーの動きを封じていた。余計な動きを見せれば確実に先程の膝蹴りが股間にお見舞いされてしまう。想像するだけで股に寒気が走った。

「ねぶってやろうかあ？」

噛み付かれた後の、血が固まり始めた自分の下唇をぞろりと舐めながらグレゴが言う。見えた舌の赤みがロンクーの背筋をぞわりと震わせ、無意識の内にグレゴのズボンから手を引き抜いていた。初めて跨がられた時も口で奉仕されたが、腰が砕け

るかと思う程グレゴは巧みに口と舌を使った。ロンクーが経験が無いからそう思ったのか、それとも本当に彼が上手いのか、それは分からないが、恐らく後者だろう。

「……噛み千切るなよ」

「んー？ どうしようかねえ」

ロンクーが上着を脱ぎながら肩を擧げて言うと、膝を付いて彼のズボンを下ろし下帯に手を掛けながらグレゴが上目遣いで薄く笑った。キスした時に唇に噛み付いたので、仕返しとばかりに根本に歯を立てられるのは避けたい。

外気に晒されたペニスをもたげている事が自分でも分かり、ロンクーは背筋をふるりと震わせた。しかし先端を指で弾かれてしまい、快感に似た痛みが電流の様になる。文句を言うおうかと思っただけ、唾液を含ませた舌が亀頭の段差をねつとりと舐め上げたので、文句は喉の奥で掻き消されてしまった。

「は……っあ、……ああ……っ」

亀頭を口に咥えられ、巧みに吸い上げられて、文句の代わりに嬌声が漏れる。その強烈な快感にうっかり腰が引けそうになっても、グレゴが片手で腰を掴んでいたのと思うようにいかなかった。音を立ててペニスの先端を舌先で擦られ、垂れた唾液で濡れた無骨な指の腹で亀頭を擦られて、息がどんとどんと上がっていく。

「この程度でガマン汁垂らしてんじゃねえよ、早漏」

「……何処その淫乱男の口の具合が良いものでな」

## バイオレンスに好きして

「下品な口答え出来る様になる前に早漏を治せよな」

グレゴが口を離すとベニスが揺れ、その先端からは先走りの体液が漏れていた。口淫であろうが手淫であろうが刺激に慣れていないロンクーには与えられる快感は強烈過ぎるのでどうしても溢れてしまう。自分が手で処理する時とは全然違う快感を求める様になってしまった彼は、グレゴが言う様に下品な言葉を使う事に対して躊躇いが無くなっていた。

淫乱、という単語がグレゴに当て嵌まるのか、ロンクーはそれすら知らないし分からない。それでも否定されない辺りあながち間違っていないのだからとも思っている。男への奉仕や挿入される事に対しての躊躇いの無さは、今までグレゴがどういう経験をしてきたのかをロンクーに知らしめていた。痛いのではないかと時折懸念してしまうが最奥を突いても快感に顔を歪めるグレゴは相手はお前だけじゃねえと無言で言っている様で、それが腹立たしくてつい平手で打ってしまった事があり、そこから彼らはお互い暴力を振るう様になってしまった。

「うく、ん……っ、……あっ……ああ、」

熱くて分厚い舌がベニスの竿の部分を根本から舐め上げていく。尿道を指の腹でぐりぐりと円を描く様に擦られて、また先走りが漏れる。思わず腰が動いてしまったのでグレゴが喉の奥で笑ったのが聞こえたのだが、恥とは思わなかった。だが憎らしい事に変わりはなく、ベニスが口に含まれた瞬間に彼の頭を思い切り掴み、不意を突かれたグレゴが手を振り切るよりも

早く彼の喉の奥までベニスで突いた。

「う、ぶっ！ おあ、んぐっ、……ぐう、がは……っ！」

「はっ、はあっ、ああ、あ、」

何度も腰を振ってグレゴの口を犯すと、苦しそうな声が漏れ聞こえてくる。しかしそれもロンクーには知った事ではなく、えずきそうになっているグレゴがだらりと手を下に落としたりを見て、ベニスが擦られている快感だけではない何かで背筋がぞくぞくと震えるのを感じた。ぼたぼたと落ちる唾液が、抵抗せずになすがままにされる事をグレゴが選択した事を物語っている。早く射精させる為に歯を立てぬ様細心の注意を払っているらしい彼の眉間には深い皺が刻まれていた。

「ああ、出る、イク……っ！」

「うえっ、げはっ、げ……っ！」

そして一層膨らんだ快感が弾けそうになった瞬間、ロンクーはグレゴの口から一気にベニスを引き抜き、苦しうに咳き込んだ彼の顔に精を吐き出した。最近処理してなかった所為かやけに白濁した体液がグレゴの額を汚したが、彼は頭を掴まれたままなので射精から逃げる事も叶わず、苦しうに呼吸しながら目を閉じ、顔を歪めていた。

「……うぶっ、がはっ！ が……っ！」

しかし射精の余韻に浸る間も無く腹部を襲った痛みに一瞬目の前が真っ白になり、腹から喉をせり上がってきた酸が喉を焼いて耐えきれず、ロンクーはその場に膝をついて躊躇い音を立

てて嘔吐した。前以てその反応がくると予測していたらしいグレゴはさっと身かわしたが、吐き終わって咳き込んでいるロンクールの頭を力一杯掴んで顔を上げさせ、ドスの利いた声で言った。

「狙ってどこにかけやがったろ」

「……かけやすそうだな」

「ぶぎけんな、ちんこへし折んぞ」

最初にキスをした時と同じ様にまた盛大に髪が抜ける音が痛みと共に頭に響いて、ロンクールは嘔吐したばかりの不快感と腹の痛みもあって顔を歪めた。しかしグレゴに対しての口答えはある程度出来る様になっていた為、睨みながら故意であると伝えると、彼は不愉快この上無さそうな表情でロンクールの髪を掴んだ手に力を籠めた。：彼なりに生え際は気にしているらしいので、そこに射精すると青筋を立てる程怒るという事は知っている。知っていて精を撒き散らして殴られては世話は無いです。

「……ゲロ臭え口近付けんな！」

「断る」

顔が近いので嫌がらせに口付けてやろうとすると案の定突き放されかけたのだが、グレゴの肩をしっかりと掴んでいたロンクールは勢い任せに唇を寄せた。勢いが良すぎて歯がぶつかり、痛みにお互い顔を顰めたが、そんな事で止めるロンクールではない。初めて跨がられた時に気が動転してからかってくるグレゴに何も言えなかったところか耐えきれず数回射精してしまった

事を思えば考えられない事であるが、今のロンクールは確かにグレゴによって随分捻くれた性格になっていた。……勿論、グレゴに対してのみ、だが。

「ん、んん、……つうぐ、んー……っ」

力ではロンクールに勝ち目は無いが、それでも後頭部を押しさえ付ける手に出来る限りの力を籠め、空いた手でグレゴの尻を引き寄せて離れようとする彼のズボンの中に手をつまむ。毛でざらつく尻の割れ目に指を滑らせると大きな体がぎくりと僅かに強張った事が分かったけれども、構わず中指を割れ目の奥にある孔に押しあて、沈めると、指から逃れようとしているのかグレゴの背が反り、苦しそうな声がお互いの口の中に反響した。どういふ表情をしているのかを知りたいのでロンクールは口付ける時も目を開けているのだが、グレゴはぎゅっと眉を寄せてこちらを睨んでいた。ぞわ、と背筋が戦慄いたのを感じた瞬間、舌に強烈な痛みが走ったが、口を咄嗟に離すだけに留まれた。どうやら舌を噛まれたらしく、口の中に鉄の味が充満する。

「臭え口で、キス、すんじゃねえ……っ」

「……指を抜けとは言わないんだな」

「は……っ、グロいちんこ、ばきばきにおっ勃てといて、良く言う、ぜ……っ 相手、してやるよ……」

濡らしもしていない指を挿入されて苦しうに、しかし口角を上げて言ったグレゴに、お前も挿れて欲しいんだらうとロンクールは思ったが、敢えて言わなかった。折角グレゴがその気に

## バイオレンスに好きして

なったのだから言う必要も無いだろうと思ったのだ。

片手で乱暴にズボンを下着ごと膝まで下ろすと、グレゴのペニスももたげているのが分かる。試しに何の躊躇いも無く指を容赦無く増やせば、ひん、と嬌声を上げて再度グレゴは膝立ちのまま背を反らせた。しかし、指から逃れようとした訳ではない。それが快感だった為だ。証拠に、ペニスが先程よりも隆起し、大きくなっている。

「はあ、あ、あひっ…、あ、あああ…っ」

引き締まった尻とは裏腹に、柔らかな内壁の肉を割って指の腹で刺激すれば、震える膝では立っていられなくなったらしいグレゴが肩に手を置き支えにしてきた。こういう時は大人しいとロンクーは思うが、目の前に無防備に晒された汗と血が滲む首元に思わず生唾が出て、先程噛み付いた所についてまた噛み付いてしまった。

「いつ…って、なーにしゃがんだこの…っ…ふあああっ」

「ん、……」

指の腹にかかるしこりの少し先をぐいと押すと、痛みに文句を言ったグレゴがすぐに快感の声を上げた。女と違って男は尻でも感じるらしいという事を誰でもないグレゴに教わったロンクーは、ぎこちなくではあるがこうやって慣らしながら善からせる事が出来る様になってきている。彼の首元の、止まりかけていた血がまた溢れ出し、歯が肉にめり込んでいくのが分かったが、そのまま食い千切りたいとは思わなかった。

「う、ああっ！ つちよ、おま… ……んぐっ」

ぞくぞくと背筋を走る快感が膨れ、一度射精したというのに既に硬く勃起したペニスをその熱の中に埋めてしまいたくて、ロンクーは指を一気に引き抜くとそのまま地面に叩き付ける様にグレゴを押し倒した。痛みに顔を歪めた彼の足に纏わり付くズボンを蹴り飛ばし、悲鳴を上げられてしまわない為に口を自分の口で塞ぐと、グレゴの唇から自分の舌からなのか分らない鉄の味が唾液に混ざる。キスを楽しむ余裕も無く、ロンクーは重みのあるグレゴの下半身を抱え尻を割ってペニスの先端を孔にあてがい、本能的に引こうとしたのだろう彼の腰を掴んで緊張したペニスを思い切り振り戻した。

「んんんんんっ!! んぐ、ん、…ぶはっ、はあっ、い… ……つてえだろ、この…っ！」

「く…っ、あ、いかわらず、狭い、な…っ！」

「お前が、殆ど慣らさねえで、挿れる、から、だろーが…っ」  
孔の中が余りに狭く、埋めたペニスがかなり圧迫されて、ロンクーは思わずその圧に眉を顰める。だがグレゴが言い返した様に、殆ど慣らさずに挿れているのだから当然の事と言えた。滑りの良くなるものを使用している訳でもないし、グレゴも筋肉質なので余計に狭い。

「お前は、こう、される方が、好き… ……だろう…っ？ 溢してる、ぞ…っ」

「はああ、ああ、あ、いつ… ……」

## バイオレンスに好きして

抜き差しする度に揺れる、グレゴのペニスをぎゅうと握り、親指と人差し指で先端を捏ねれば、粘度のある体液が染み出して彼の腹筋に溢れた。乱暴に、それこそ犯されてもこんな反応をする程までのグレゴの体を、どれだけの人間がすり抜けて行ったのかロンクーには分からないし想像もつかない。自分は何人目の男になるのかと考えると、胸の奥底がざわつのが分かった。それが馬鹿馬鹿しい独占欲であると、ロンクーも承知だ。

「……何人、啜え込んだ……？　今まで、ここに」

「……は……っ、お前、食ったパンの数、とか、いちいち……数えてんのかあ……っ？」

「……………っ！」

「がっ……………!!」

それなのに不毛な事を聞いてしまったロンクーは、これ以上無く馬鹿にしている目をして鼻で笑ったグレゴの首を思わず掴み、両の親指に力を籠めて思い切り圧迫した。指に伝わる脈拍が生々しく、息苦しさを訴える様にグレゴの顔が歪む。首を絞めた所為か、ペニスを包む内壁の圧が輪を増して高くなり、ロンクーまで顔を歪めてしまう。だが、その表情になってしまった理由はそれだけではない。グレゴが抵抗しなかったからだ。

グレゴはロンクーが殴れば殴り返してくるし、噛み付けは噛み付き返してくる。場合によってはされた暴力より酷く、例えば今日の様に嘔吐する程殴ってきたりもする癖に、首を絞めても何の抵抗もされなかった。膝で脇腹を蹴られるなどの反撃は

覚悟していたのに、腕さえ掴まれなかったどころか微かに口角を上げて見下した様な目で見上げてきたグレゴが心の底から腹立たしくて、ロンクーは思わずグレゴの喉を絞めていた手を離して彼の頬を力一杯平手で打っていた。

「っ!!」

だが、叩かれたグレゴが顔を横に向けたまま舌打ちをしたかと思うと目にも留まらぬ速さで拳が飛んできて、ロンクーはそれを避ける事が出来ずもろに頬に食らってしまった。幸いにも骨に異常は無さそうだが、鼻血が出たのは分かった。

「……つまんねえ嫉妬してる暇があんならとっつと腰振ってひいひい言ってる」

「……ひいひい言わせてくれの間違いだろう？」

「いちいち口答えすんじゃねえ、いい加減うせえ……　っあああ！　あ、が……っ　べへっ！」

あまりにも口答えをしていたらどうとう青筋を立てられてしまったので、黙らせる為に止めていた腰を再度押し進めると、グレゴは喉を反らせて大きく反応した。先程ロンクーが頬を打った所為で鼻血が出ていたグレゴは喉を反らせていた為に血が外に出て行かず喉に溜まってしまった様で、顔を歪めたまま忌々しそうに血を吐き出したのだが、ロンクーも鼻血が出たのでその臭いは気にならない。

狭い内部を割る様に、抉る様に突き上げれば、グレゴは痛いのかそれとも気持ち良いのか、或いは両方なのか、内壁の肉を

## バイオレンスに好きして

敵らせながら喘いだ。その反応を見ていれば相手など自分でもなくとも良いのだとロンクーに知らしめていて、せめてもの憂き晴らしに先走りを漏らしているグレゴのペニスの亀頭を握ると、彼は一瞬全身を強張らせて下唇を思い切り噛んだ。ロンクーが噛んだ痕を自分で傷付けたらしく、血が滲んでいくのが見える。「ひぎっ……ひ、ひいつ、うあ、ああああっ！」

「ぐう……っ！」  
そして挿入に気を取られているグレゴの腰に素早く手を滑らせると、彼は一番大きく反応して身を振って逃げようとし、無意識なのだろうが孔を思い切り締め付けてきた。腰は、グレゴの性感帯だ。彼の腰には特殊な刺青が施されており、体温が上がった時にだけ浮かび上がるのだが、それを触るとペニスを抜くよりも挿入で突き上げるよりも善がる。ただし触られる事を嫌う為、余程ロンクーが隙を突いた時でない限り愛撫出来ない。

「あつ、ああ、やめ、や、ああああ、あー……っ！」  
「うう、つく、……力を、抜け……っ！」

「そ、思う、なら、触るんじゃね………んんんっ！」  
血まみれになった口にキスをすれば、密着した体にグレゴの隆起したペニス擦れる。汗と体液でぬめるのが気持ち良いのだろう、グレゴはロンクーの手から逃れる様に、またペニスをロンクーの腹筋に擦り付ける様に腰をくねらせた。相変わらずこういう動きが厭らしいとロンクーは思ったが、突然襲った背の痛みに思わず絡めていたグレゴの舌の先端を噛んでしまった。

「い……っ、ああ、痛い、だろう……っ！」  
「痛く、してんだから、当たり前だろうがっ！」

痛みの原因は、背に爪を立てられて引つ掻かれた事だった。少し痕が付くなどという可愛らしいものではない、それこそ皮膚を抉る様にぎりぎり引つ掻かれ、余りの痛みに脂汗が滲む。しかも腕に力を籠めて引き寄せられ、しまったと思う間も無く思い切り肩に噛み付かれてしまった。

「いあああつ、ちっ……、この……っ！」  
「んんっ、ん、んっ、……ぶはっ、はあつ、……相、変わらず、お前の血は不味いなあ……っ！」

食い千切られるのではないかと思う程の力で噛み付かれたので流石にやばいと思つたロンクーは、腰に触れる手を離す代わりに、もどかしくなる様な挿入を繰り返して、濡れそぼつたグレゴのペニスを抜く。睾丸にはべつたりと陰毛が張り付き、手にざらつきを齎していった。

「……その、代わり、下の口が美味しいもの啜え込んで、いる、だろう……っ！」

「あが……っ、ひ、ぎい……っ！」  
口を離し可愛げの無い文句を言ったグレゴの脇腹を片手でしっかりと捕まえ、容赦なく奥を突けば、濁った悲鳴を上げたグレゴのぎゅつと閉じた目から涙が一筋零れた。その涙は嘔吐した時に溢れる涙の様に、悲しかったりつらかったりして出た涙ではないとロンクーにも分かる。だが、彼はどういった形で



## バイオレンスに好きして

あれ、自分がしかした行為によってグレゴが零す涙が好きだった。支配出来た気分になれるからだ。勿論、そんな事は決してないのだけれども。

汗に混じって流れた涙を吸いながら、僅かに萎えてしまったグレゴのペニスの先端を指の腹で擦る。どろどろになったペニスは射精への刺激を欲しているのが分かって、ロンクーは自分の両肩に爪を立てて必死に挿入に耐えている。グレゴの耳を愛撫する様に軽く歯を立て、掌全体でペニスを扱いた。自分のものを扱う様に、快感を得られる様に。

「ああああ、あひっ！ ひいつ、ひあああっ！」

「ん……………あ、善い……………出る……………」

「はっ、あはっ、……………っ出してみる……………よ……………」

「……………遠慮、せんぞ……………」

「おお、来い……………よっ……………こーんなおっさんに、欲情して、ちんこ突っ込んで、中出し、キメる、ド変態がっ!!」

「そうか……………っ、全部、飲め、よ……………っ……………このド淫乱っ!!」

ロンクーも限界が近かった為に射精しそうだと思えば、グレゴは足をロンクーの腰に絡めて引き寄せた。普段なら決して中で達する事を許してくれないのになんか風が吹くかと思えば、軽蔑の目で見上げて笑い、吐き捨てる様に言ったので、ロンクーも同じ様に吐き捨てて抜ける直前までペニスを引き抜き、そして一気に最奥まで突き上げた。

「はっ、あっ、あああっ、ああ……………っ!!」

「ひっ、い……………あ……………っ……………!!」

最奥にぶつけた強烈な快感が腰を襲い、ロンクーはグレゴの中に精を吐き出した。一滴も出しそびれない様に腰を動かし、達したらしいグレゴのペニスを握っていた手を離す。血と汗と精液が混ざった変な臭いが漂っていたが、射精の余韻で体を痙攣させている二人にはそんなものは気にならなかったしどうでも良かった。ただ、殴られたり蹴られたり噛み付かれたりした体中の痛みは、どうにもならなかった。

天幕の中、大きな体を丸めて眠っているグレゴの背を見ながらロンクーはぼんやりしていた。セックスをする時は毎回屋外でやるが、戦闘後にセックスしているとは言え明らかに戦闘で負った傷ではないものを体中にこさえる二人に対して内密に癒やしの杖を使ってくれるセルジュは、今日もこやかに笑っていい加減にしないかと杖で二人を小突いてからこの天幕の中に閉じ込めた。怪我は治っても痕は残るし、砂に擦れて穴が空いたり血や精液で汚れた服を洗わなければならないから、替えの服を用意して貰えるまでほぼ全裸で居なければならないから。それに対しては、ロンクーも申し訳ないと思っている。

暴力無しでセックスすれば良いという事は、ロンクーにも分かる。だがどうしてもグレゴに対して乱暴になってしまうのは

## バイオレンスに好きして

自分がどう足掻いても彼に敵わないから、そして彼が決して自分を見ないからなのだ。初めて跨がられた時からずっとその思いがあるから、振り向かせたくて暴力的になってしまふ。普段のロンクーからは考えられない様な言動をしてしまふのだ。

「……………」

包まった毛布からはみ出ているグレゴの素肌には古い傷が見え、その中に自分がつけた傷を認めてロンクーは何となく溜飲を下ろす。あの傷が消えずに残れば良いと思つた。だが、きつとグレゴはその傷も誰がいつ付けたのかさえずる忘れるのだらう。それが悔しくて、また傷付けてしまふ。悪循環だ。

そんな事を考えている時間があるなら自分も体を休めねば、と思い立ったロンクーは、グレゴと背中合わせになつて横になりながら下半身に掛けていた毛布を肩まで被り、グレゴの寝息を子守唄にしながら目を閉じる。癒やし杖の杖で全身の怪我は治つている筈なのに、グレゴから噛まれた肩の痕が何故か鈍い痛みを与えていて、ロンクーは何となくその痛みが大事なものの様に思えて仕方なかった。

バイオレンスに好きして・END